

# 国語(第3回)

		得点率 (%)
1 説明文	問一	79.6
	問二	75.0
	問三	76.1
	問四	56.3
	問五	51.8
	問六	90.3
	問七	87.5
	問八	57.2
2 物語文	問一	52.3
	問二	86.6
	問三	46.3
	問四	62.0
	問五	41.2
	問六	49.2
	問七	98.8
	問八	50.0

合格者最高点 94

合格者最低点 56

## 1

出典 森山徹「ダンゴムシに心はあるのか」

日常語として使われている「心」ということばの概念を見直し、あらたな視点から捉えなおそうとする文章です。抽象的な話題を具体例で説明しようとする筆者の意図を正確に捉えることができるかを問いました。

問一 文中で筆者が定義した言葉の意味を問う問題です。1行目にある傍線(1)「日常的な心の概念」については、13行目から始まる第3段落において、「私の内にある何者か」と言い換え、さらに「普段はうかがい知れない『もう一人の私』といった感じ」、あるいは「私の内にあるもう一人の私」と言い換えています。このことを述べている選択肢はアです。ちなみにイは、「病気や怪我などの異常事態が起きたときに強く感じられるもの」という限定が本文にはありません。ウは、「自分が正しいことを証明しなければならないときに限って」がおかしく、エは、「五感で捉えられるもの」というのが26行目の「五感では捉えられません」という記述に反します。

問二 7行目にある傍線(2)の中に表現されている「心」とはなにかについては、直後に「あなたに贈り物をするときにわざわざ込められ」るものであり、「あなたに身の潔白を証明するときにわざわざ開示される」ものと言い換えられています。このことは19行目以降に繰り返された上で、21行目に「いずれの場合も、普段うかがい知れない『内なるわたくし』の存在をあなたに知らせることで、特別な親愛や誠実を表明する」とあります。指定された字数で答えるならばこの部分しかありません。抜き出しであり、指定の文末「する

こと。」に自然に接続するように注意する必要があります。字数の関係で「普段うかがい知れない」から始め、「誠実を表明」までが解答部分になります

問三 文中に特別に定義された語句の意味を問う問題です。27行目の傍線(3)「第六感的感覚」については直後に「日常でしばしば経験している感覚」とあります。これだけでは内容がわからないので、さらに次の段落を読むと、31行目で「気配」という語に置き換えられ、それを32行目で「一般の私たちが『あるはずの実態が隠れているとき』に、普通に得る感覚」と説明しています。この部分を利用すればよいのです。

問四 文中にある筆者の意見の根拠としてあげている部分を探す問題です。41行目にある傍線(4)の主語は40行目にある「科学の世界では心を脳の特定部位であると主張する科学者」です。科学者としては心というものが解剖学的に脳の一部分であり、独立した「魂」のようなものではないと日ごろから主張していても、もしその部位を失ってしまった人を前にするとその人に心があると感じるというのです。それは直後にあるように、たとえ脳が損傷してしまった人にもその内部に「内なるかれ」を感じるからだというのです。解答の多くは「彼」が誰であるのかについての説明が不足していました。

問五 61行目から始まる傍線(5)具体例の部分で正確に読み取ることを求める問題です。54行目から始まる段落の中で筆者は、スーツを着た「私」が贈り物をする時の例をあげています。このとき表面に現れるスーツ姿や荒い呼吸、汗の臭いなどは他人に感じられますが、五感では捉えられない「内なるわたくし」があるというのです。それは夕飯のことを考えたり、意識に上らない程度の湿疹の症状だったりします。そうしたものが捉えられない理由について67行目からの部分で、空腹を口にしたり、背中をかくなどしたりする具体的な行動がないことが原因だといいます。さらにそれをまとめているのが、74行目の「それぞれの行動は、『抑制』されています。」という表現です。指定字数の関係からこの部分を使って答えます。「なぜ」という設問文に対応するために解答を「から。」あるいは「ので。」という文末でまとめます。

問六 68行目のAは話題の転換を意味する「さて」、72行目のBは逆接の「しかし」、75行目のCはそれまでの論述をまとめる「したがって」、77行目のDは前段落の内容を受けて次の論述に進む「このように」が入ります。

問七 漢字の書き取りの問題です。一画ずつ丁寧に書くことが必要です。答案には同音異義の漢字を書いた誤答が数多くありました。文章を読んでから答える必要があります。

問八 本文の内容に合うものを選ぶ問題です。正解はエです。エは問五でも考えたことであり、人は相手の行動の発現をとおしてその人物の「内なるわたくし」を感じるのであり、それがなければ察することができないという54行目以降の記述に合致します。ちなみに、アは、「心があたかも実体を持つかのように扱われることは、心という実体が存在することの証拠と言える。」が本文にはありません。筆者は4行目で「後に日常的な

心の概念と合致する対象が現実の世に存在するかどうかを探る際に有効であると思われます。」とは述べていますが、それが心の存在そのものの証拠とは述べてはいません。イは、「特別の訓練を積み重ねることができるようになる。」が文中にはありません。また 31 行目の「特別な能力を持つ人が超越的对象に感じる感覚ではなく」とあるのにも反しています。

## 2

### 出典

永嶋恵美『廃工場のティンカー・ベル』からの出題です。なお、問題文には一部省略した部分があります。主人公の美野里は、かつて自分が世話をしていたが行方不明になっていた野良猫の「フタバ」らしき猫の末期を会社の同僚の野島から聞きます。その真実が明かされていく途中での美野里の揺れ動く心理が描かれている場面です。真相はどこにあるのかを読者は二人の会話の中からうかがい知るといった趣向の文章になっています。

問一 14 行目にある傍線（1）の美野里の発言の理由を問う問題です。直前の野島の発言「そうか。埋めなくても、その手があったのか」に対して「だめです」といっているのですが、ここでいう「その手」とは 9 行目にある「散骨」という言葉に対する反応です。これらを踏まえて選択肢を選びます。

正解はエです。美野里は、野島が埋葬したのを人骨だと思い込んでいることが踏まえられており、これが正解になります。

ちなみに、アは、美野里が野島の持っていた「遺骨」が猫のものだと知っていたという前提がまちがっています。イは、「灰にせず骨のままで撒くのは非常識」がまちがいです。骨か灰かということはここでは問題になってはいません。ウは、「自分で轢き殺してしまった」があっていません。野島は 20 行目になって「自転車で轢いちゃったのかと思って、すごく焦ったけど」と発言しており、このときはまだ死因については何も語られていません。また、野島が轢いたという事実もありません。

問二 28 行目の傍線（2）の美野里の「心臓が跳ね上が」った原因を考えます。ここまでの部分で美野里は、野島が埋葬した骨の主が猫であることに気づきます。さらにその猫が首輪のない野良猫であったことを知り、かつてこの付近で行方不明になったフタバの存在が急浮上したことになります。このこと指定字数内でまとめます。

問三 68 行目にある傍線（3）の美野里の心中を問う問題です。ここでの手を合わせるとは感謝の思いを意味します。何に対して感謝したのかを考えると「フタバ」と思われる猫を病院に運んだり、火葬したりしてくれた野島に対する思いと読み取れます。手を合わせるといふ行為が感謝を意味すると読み取れなかったために誤答した答案が目立ちました。

問四 87行目の傍線（4）の「失望」とは、死んだ猫が自分の知っているフタバという猫ではないかところまでは思っていたのですが、足の異常という情報から別の猫ではないかと判断したことからおきた気持ちです。では、どうして別の猫であることが失望につながるのかを考えます。それは長い間気にかけていたフタバの存在が確かめられたと思ったのにそれが無になってしまったことと考えられます。

問五 131行目傍線（5）の比喩的な表現が具体的に示すものを説明する問題です。ここはフタバが活着しているときにはわからなかったことが、死後、獣医の診断によって明かされることをさしています。具体的には126行目の「フタバの足が悪いことや腎臓を患っていることに気づけなかった」という内容を踏まえることが求められます。答えはよく書けているものとそうではないものとの差がありました。

問六 154行目の傍線（6）にある風景描写の表現効果を問う問題です。物語では人物の心情描写を風景に託して表現することもあります。ここでは回送バスの立てた轟音が美野里の感情の変化を表すきっかけとして使われています。傍線部の直前では美野里はフタバと一緒にいた過去の回想にひたっており、直後では野島に声をかけられた現在を思っています。このことを選択肢から選びます。そのことが表現されているアが正解です。

ちなみに、イは、「ゆったりと流れていた」があいまいです。またこの場面での「緊張感」もふさわしくありません。ウは、回送バスという表現に注目したのですが、美野里の心のむなしさがふさわしくありません。美野里の心の中はフタバの思いであふれており、むなしという表現はあたりません。エは、野島の言葉の深刻さを和らげているという表現があたりません。「何か言われた気がして」とはありますが、その内容についての深刻さは問題文の中だけでは読み取ることができません。

問七 「猫」に関する慣用句の知識を問いました。とてもよくできていました。

問八 本文の内容に合うものを選ぶ問題です。野島やその友人が猫を病院に運んだり、火葬したりして手厚く扱ったことに対して美野里が感謝しているのが、先ほど問三で考察した68行目の傍線（3）の表現から伺うことができます。また、151行目の「十三回忌の今年、示し合わせたように彼をこの町に寄越したのは、本当にフタバだのかもしれない」という表現から、「こうした運命はその猫が呼んだのではないかと考えた。」という選択肢の記述に一致します。よって正解はエとなります。

ちなみに、アは、野島が埋葬しようとしていた猫の正体を美野里が初めからわかっていたという内容が本文と異なります。この物語には埋葬された猫の素性が徐々に明かされていく間に起きる美野里の心情の変化が描かれているのです。イは、野島が猫を拾ったのは12年前でしたが、その「夜は土砂降り」（60行目）であったことを美野里はしっかりと覚えていました。また、その日が特定できたあとも、その猫がフタバであるかどうかに関しては耳の形や背中模様などを確かめることによってようやく判断できたのです。よって「これを知った時点で美野里はその猫がフタバであることを確信した。」も不正確ということになります。ウは、死んだ猫をフタバと特定した理由として「耳の切れ目」が含まれ

ていることが間違いです。野島は「背中の模様」に関しては覚えていましたが、98行目に「どうだったかな」とあるように、耳の切れ目は覚えていませんでした。紛らわしいイを選んだ答案が多く見られました。